

VOL.59

2022年2月発行

事務局

〒115-8560

東京都北区赤羽台一丁目7番11号

東洋大学ライフデザイン学部

WELLB HUB-2 20901研究室

(吉田研究室)

日本精神障害者リハビリテーション学会

News Letter

INDEX

01 日本精神障害者リハビリ
テーション学会第27回愛
知大会報告

02 第28回愛知大会学会
主催シンポジウム「実践と
研究の融合ー論点整理か
ら合意形成へー」

03 参加者の声

04 愛知大会研修セミナー
の報告

05 日本精神障害者リハビリ
テーション学会第29回群
馬オンライン大会のご案内

06 事務局からのお知らせ



日本精神障害者リハビリテーション学会第27回愛知大会報告

令和3年12月11日(土)・12日(日)に、日本精神障害者リハビリテーション学会第28回愛知大会を開催いたしました。大会テーマを「異障害コミュニケーション」とし、医療法人福智会すずかけクリニック院長の福智寿彦先生に大会長を、愛知医科大学精神神経科教授の兼本浩祐先生と愛知医科大学名誉教授/岐阜保健大学看護学部精神看護学教授の多喜田恵子先生に副大会長をお務めいただき、県内の多数の事業所職員に実行委員として大会運営いただきました。

昨年の大会はコロナ禍により中止になり2年ぶりとなった今大会は、当学会初となるオンライン形式での開催となりました。

オンライン配信・オンデマンド配信により、大会長講演「異障害コミュニケーションから気付いたりカバリーのサポート」をはじめ、副大会長基調講演、特別基調講演、大会特別講演、特別講演2演題、教育講演2演題、大会長企画の当事者シンポジウム、学会主催シンポジウム、映画上映「友達やめた」、野中賞記念講演、自主企画、一般演題など、多くのプログラムが実施されました。

学会主催の研修セミナーでは3つの一般企画の他、特別企画ではパトリア・ディーン博士の講演が実現し240名を超える方々にご視聴いただき、多くの反響がありました。それは研修委員の久留米大学坂本明子先生を始め携わった方々の努力のおかげでもありました。

今回プログラムの多くは2日間の大会期間後も視聴できるなど、従来の現地開催型とは違う、オンラインの持ち味が前面に出た大会となりました。

また、初の取り組みとして、日本心理教育・家族教室ネットワークとの共同開催シンポジウムを実施しました。次回大会でも団体の枠を越えた共同企画の開催へ向けて準備を進めています。

次回もオンライン形式での開催が決まり、まだまだ皆さまと直接お会いする機会には恵まれません、こんな状況だからこそできる交流のあり方を一緒に考えていきましょう。



<http://www.japr.jp>
Mail japr.jimukyoku@gmail.com

第28回愛知大会学会主催シンポジウム

「実践と研究の融合—論点整理から合意形成へ—」

後藤雅博(医療法人崇徳会 こころのクリニック ウイズ)

3回シリーズで「実践」と「研究成果」の融合について考えてきた本企画は今回が最終回である。第26回東京大会では20年にわたる本学会の歩みとともに、就労支援、精神医学、若手研究者の立場から見る精神科リハビリテーションの展望が紹介された。第27回大阪大会では、実践家の立場、研究者の立場のそれぞれから「実践と研究の融合」について自身の経験を交えた活動紹介があり、リフレクティングの手法を用いて、お互いの意見を客観的に見つつ、深めあおうとする試みが行われた。

今年度は最終回として本学会の今後につながる議論を目指して、まず3人のシンポジストの報告があった。国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所山口創生氏からは研究者の立場として、現場の問題を政策につなげる際の様々な困難さと問題の所在を認識することの重要性、特定非営利活動法人あすなろの彼谷哲志氏からは現場での実践者及び当事者として研究者とのコミュニケーションの課題があること、障害者職業総合センター大石甲氏からは事例や経験を越えて実践と研究が近づくには、活動範囲を広げいま一步踏み出すことが必要であることが報告された。座長は副学会長である岩崎香氏と筆者が務めている。

ディスカッションでは、共通の現状認識として、現場と研究者の交流、コミュニケーションの不足と本来あるべき<実践者のアイデア→事例→研究(RCT)→政策>のルートがうまく機能していないこと、その中で変化の岐路に立っている本学会に何ができるかが問われていることがまず確認された。

コミュニケーションに関しては、まず現場のトップがどう考えるかが大事で、研究者としては事例検討に参加するなどの人間関係と仕組みや立場を理解すること、結果より意図の誠実な説明が必要などの意見が出た。また現場としても明確なニーズが持てるかどうか問われる事も指摘された。政策への反映ルートの不十分さについては当事者活動も研究も一部の声の大きい人で決まるという問題点があるので、現場、当事者活動、研究、学会でもどう外部、異質な声を取り入れていくかが必要と指摘された。

実践・研究・政策をつなぐ人物像や立場についての参加者の質問があり、研究の素地がある現場の上の人とそのための「学ぶ制度」、また研究以外、実践者以外など別な活動分野を持つ潤滑油的な「外の人」、あるいは当事者性が必要で、それも複数の方がいいという意見が出た。またこのような多様性の確保、つなぐ役や組織を動かすことに対する経済的、地位的補償も必要ではないかとの議論があった。

結論ではないが、今後学会には実践、研究、政策を結びつける方法論、外部や多様性の確保、現場と研究者がお互い学ぶ場面を提供するなどの課題があることが確認された。

<http://www.japrr.jp>

Mail japrr.jimukyoku@gmail.com

参加者の声

愛知大会に参加して

東洋大学ライフデザイン学研究所 博士後期課程 志村 敬親

生まれて初めての完全オンラインによる学会参加でした。今年度、本学会へ入会した若輩者のため、それまでの大会の雰囲気を知る立場ではありません。ただ、他学会の大会・総会においても、その内容もさることながら、開催地に足を運び、土地の銘品、銘酒を楽しむことに重きを置いている身としては、正直なところ少々盛り上がり欠けるのではと、大変失礼な想像をしておりました。結果、予想は大きく裏切られました。

まず、数多くの一般演題報告を拝聴することができました。通常であれば、同時刻に複数開催される分科会のなかから、テーマを一つ選んで参加する形になるのではないのでしょうか。今回、オンデマンド方式であったため、「好きな時に・好きなだけ」参加することができ、普段であれば、聴く機会がないであろうテーマにアクセスすることができました。特に、ピアサポートに関する研究報告、地域移行に関する実践報告は、私自身の日頃の実践に関連する領域であることから、新たな知見に触れることができました。理解が及ばなかったところ、聞き逃したところを何度もリピートできることも有難いですね。

また、学会主催シンポジウムでは、研究と実践を架橋することの重要性について考えるなかで、「実践者&研究者」の端くれとしての、自らの役割を再認識することとなりました。もっとも刺激を受けたプログラムでした。

そして、全体を通して、主催者や登壇・報告者、そして参加者が織りなす熱気は、時空を超えて共有されるものだと、認識を新たにしました。各地で研究や実践が続けられている皆様と、ZOOMの画面越しに「離れていてもつながっている」感覚を体験することができました。

最後に、完全オンラインの学会運営という、未知の領域に果敢にチャレンジされた主催者の方々、そして運営に携わった全ての皆様、大変お疲れさまでした。大成功だったのではないのでしょうか。素晴らしい会を開催していただき、心より感謝申し上げます。

日本精神障害者リハビリテーション学会第28回愛知大会に寄せて

特定医療法人大阪精神医学研究所 新阿武山病院 野口 裕己

去る2021年12月、私にとって二度目の日本精神障害者リハビリテーション学会の発表の場に参加させて頂きました。2019年大阪大会では臨床研究の実践者として、また、大会運営を担う立場として、本学会が設けて下さった場で様々な経験をさせて頂きました。また、本大会におきましては、コロナ禍という情勢の中で大会運営に尽力された方々への感謝を、この場を借りて申し上げなければなりません。本当に有り難うございました。

私は臨床で働く一看護師です。日々の臨床では多種多様な実践が行われています。それらは実践知として活かされることはあっても、多くの結果がその真実を明らかにされる

<http://www.japr.jp>

Mail japr.jimukyoku@gmail.com

ことなく過去へと消散していきます。私が臨床で技術の実践者の立場をとる以上、行われた結果に対して真摯でなければ。その考えが、私が臨床研究に取り組む切っ掛けとなりました。

研究という行為ほど、かける労力に対して対価が釣り合わないものはない。それが正直な今の私の感想です。私のような、臨床でただただ働く一看護師の臨床研究などは特にそう感じます。サンプル数を確保することも、資金を用意することも、周囲の理解と協力を得ていくことも難しい。私ではない存在がこの取り組みを担ってくれた方が、もっと真実は鮮明で力強く、人々に貢献してくれるのではないかと何度も思いました。

しかし、視点を他者貢献感ではなく自己貢献感へ向けると、「やって本当に良かった。」と思えます。自分の行為を通じて人の歩みを感じられたこと、消費者ではなく生産者、或いは発掘者になれた気がして嬉しかったのです。私の幼少期の夢は恐竜博士か考古学者だったので、元々埋もれてしまうものを掘り上げたかったのかもしれない。

私のリカバリーに繋がる学びを与えて下さった本学会に厚く御礼申し上げます。

日本精神障害者リハビリテーション学会に参加して

岩見沢市立総合病院 曳田 憲昭

今回私は、初めて日本精神障害者リハビリテーション学会へ参加し修士論文の内容について発表させていただきました。拙い発表だったとは思いますが、ご聴講して下さった皆様ありがとうございます。

コロナ禍によるオンライン開催のため当事者や実践者、研究者にお会い出来なかったことは残念でしたが、時間や場所を問わず様々な発表や講演を聞くことが出来たのでオンライン開催の恩恵をたくさんいただきました。

一番印象に残ったのはパトリシア・ディーガン氏の講演で、何度も聴講させていただきました。特に、その講演の中で語られた「パーソナルメディスン」という考えにはとても感銘を受けました。我々医療者はいかに当事者の自律性を尊重し、どういった関わりによって彼らのリカバリーへの積極的な行動に寄与できるかを考えなければならないと、改めて感じました。ディーガン氏のリカバリーの体験は我々医療者にたくさんの気づきを与えてくれたと思います。できることなら、対面で講演後にディーガン氏の講演について様々な方とディスカッションをしたかったです。

ディーガン氏の講演以外にも本大会への参加を通じ、全国にいる皆さんの実践や考え方を聞くことで今後の実践に活かせるようなアイデアをたくさん頂くことが出来ました。自施設のみでの経験ではどうしても偏ってしまう部分が多々あるので、全国の皆さんの意見を聞ける機会は本当に貴重なことと思います。愛知大会の運営に携わった皆様、今回このような機会をくださり本当にありがとうございました。

<http://www.japr.jp>

Mail japr.jimukyoku@gmail.com

日本精神障害者リハビリテーション学会愛知大会に参加して
神戸大学大学院保健学研究科 廣田 美里

私は日本精神障害者リハビリテーション学会の雰囲気がとても好きです。それは、大学病院で看護師として働いていた頃の、多職種による症例検討会を思い出すからかもしれません。当時、医師、看護師、作業療法士、精神保健福祉士、臨床心理士が会に参加し、一人の患者とその家族の今後の治療方針について検討を行っていました。約1時間半、参加者はその症例に集中し、職種も経験年数をも超えて、意見し、話し合いました。話し合う前には、チーム内に困難さ、無力感、あきらめなどの雰囲気が立ち込めていたのが、症例検討会を終える時には、一筋の希望が見え、まだまだこれから!とチームの活力が湧き上がってくるような雰囲気に変わったことを記憶しています。初めて日本精神障害者リハビリテーション学会に参加させていただいたとき、その雰囲気と感覚を思い出しました。多職種の強みが生かされ、それゆえ新たな気づきを得ることができる、こんな素敵な学会があるのだと感動しました。

今年はオンライン開催となり、少し寂しさも感じましたが、それでもやはり参加させていただくと、本学会ならではの交流と、そこから得られる気づきがいくつもありました。

特に記憶に残っているのは、現場で働いていらっしゃる医師と専門医のセッションで、デイケアでの困りごとについて話し合われていた場面です。医師が感じていらっしゃる困りごとは、先日私が大変お世話になっているデイケアの支援者がおっしゃっていたこととまったく同じ内容でした。施設や地域が異なっても同じような現象が起きているのだなあと感じつつ、専門医はどのようにおっしゃられるのだろうと聞いていると、そのご見解がとても明解で、なるほど、と得心し、実践的知見を得ることができました。

やはり日本精神障害者リハビリテーション学会はワクワクしますね。また来年度も参加させていただきたいと思っています。

愛知大会に参加して

NPO 法人コミュネット楽創 就労移行支援事業所コンポステラ 船本 修平

前回の大阪大会に続き2回目の参加になります。今回も一般演題から実践発表をさせて頂きました。私たちはIPS (Individual Placement and Support) モデルを実践しており、どんな病気や障がいを抱えていても働きたい思いがあれば誰でも働ける、またその機会は誰にでもあることを第一の信条にしています。

前回の大阪大会は会場に集まったの開催ということもあり、実践発表ではたくさんの質問を頂きました。IPS の可能性や課題に触れられる中で、一般求人から多くの方が様々な職種に就職していることに関心をもって頂きました。このようなやりとりが、その後の私たちの取り組みの励みとなり、また課題に対しても真摯に向き合って行動していく原動力ともなりました。

2年ぶりとなった今大会では「すべての人に就労の機会はある」と題し実践発表させて頂きました。前回の発表からの2年間、私たちが学び、実践したことを振り返る意味も込

<http://www.japr.jp>

Mail japr.jimukyoku@gmail.com

めて演題を出しました。参加された方とのリアルタイムでのやり取りは出来ませんでした
が、演題を出したことで、私たちのこれからの役割・取り組んでいかなければならいこと
を再確認することができたと感じています。

そして今回は、パトリシア・ディーガンさんのお話を聞いたことが、さらなる収穫となりました。
私たちが勉強する本の中に、ストレングスモデル[第3版](金剛出版)がありますが、冒頭に
ディーガンさんのメッセージがあります。“弱い部分のなかに、ストレングスはあ
る”こと、“ストレングスが認識されれば、サービス提供者とユーザーは、役立つ援助を一
緒につくり始めることができる”ことが綴られています。今回直接お話を聞くことで、あら
ためてその大切さを認識させられました。

誰もが希望をもった人生を送っていくために、私たちの役割はなんであるかを学ぶ機会
として、今後も学会の参加と実践発表を続けていきたいと思えます。



愛知大会研修セミナーの報告

研修委員会委員長 浅見 隆康

愛知大会の研修セミナーには会員、非会員合わせて356名が参加しました。今回はじめてオンラインによる研修セミナーの実施で、参加の仕方に戸惑われた方もいらっしゃったと思います。それでもディーガンさんの講演には243名もの参加がありました。

2022年12月10日、12月11日に開催されます群馬オンライン大会の際に、どのような研修セミナーを開催するかまだ決まっておりませんが、決まり次第学会ホームページなどで紹介させていただきます。研修セミナーの報告を、ディーガンさんにつきましては大川理事から、研究法入門につきましてはこのセミナーの担当者でもある松田理事からさせていただきます。

<ディーガンさんの講演をお聞きして>

研修委員会担当理事 大川 浩子

理事として着任早々の研修委員会で、本研修セミナーでディーガンさんにご講演をいただく予定であると知りました。今回のご講演の実現には多くの方のご協力があり、本当に感謝しております。内容は一つ目がディーガンさん自身のリカバリーについて、二つ目が現在取り組んでおられるパーソナル・メディシンの活動について、三つ目が日本からの質問にお答えしていただけるという豪華な構成でした。企画側としては初のオンライン研修セミナーと言うことで準備に右往左往した反面、ディーガンさんのように海外からの演者を招聘できたのは、コロナ禍での数少ない宝物だと思っています。

ディーガンさんの講演を視聴して、やはり、その人自身の言葉で語られるリカバリーの物語は心を打つものがあると思いました。ディーガンさんからのプレゼントであるポスターも一枚一枚に書かれている言葉が、本当に心からディーガンさんの言葉なのだと感じました。私の所属法人でもこのディーガンさんのポスターが掲示されており、きっと、多くの方が影響を受けたのではないかと思います。このディーガンさんが蒔いてくれたリカバリーの種が、今後、全国で花開いていくのではないかと思います。

<研究法入門セミナー>

研修委員会担当理事 松田 康裕

第1回は松田より「実践から研究の芽を見つけ研究に育てるコツ」について、安保理事より「実践から研究へー私の指導経験を踏まえた事例の紹介ー」についての2つの内容を昨年11月30日から1月31日までオンデマンド配信しました。15名の事前申し込みがありましたが、最終的には8名の参加となりました。内容に関するアンケートは、理解度と役立ち度とも高評価でしたが、「第3の因子や概念モデル図の説明は難しかった」との声を頂きました。第2回は第1回目の研修を受けて、参加者が事前に臨床疑問を、PICO/PECOの形に整理し、リサーチ・クエスチョンを作成したうえで、同年12月19日に7名の参加者と2時間にわたって議論したり、助言したりしました。内容に関するアンケートとして、理解度と役立ち度とも高評価でしたが、「研修時間が短い」との回答が多くを占めていました。また「PICO/PECOについてもう少し詳しく知りたかった」との要望も頂きました。第3回は本年5月8日に学会発表や研究実践に向けたフォローアップ支援を行う予定です。

<http://www.japr.jp>

Mail japr.jimukyoku@gmail.com

日本精神障害者リハビリテーション学会第29回群馬オンライン大会のご案内

第29回群馬オンライン大会 大会長 浅見 隆康（群馬大学健康支援総合センター）

日本精神障害者リハビリテーション学会第29回群馬オンライン大会大会長の浅見です。学術集会の意義は本来ですと、開催地にて参加いただく方々が顔を合わせ、日頃の取組みを紹介し合い、また学び合い、研鑽を深める場としてあるとは思いますが、未だ現在コロナ禍の折ですので、昨年に引き続き、第29回大会もオンラインにて行うことが理事会で決定されました。



大会は、「できるを増やす」から地域共生社会を創る、をテーマに2022年12月10日（土）、12月11日（日）に開催されますので、今から日程の調整をお願いいたします。

オンライン大会ではありますが、参加の皆様が交流しやすい場にしたいと考えています。そのためにはいろいろな企画が必要となりますので、大会開催の準備を行う実行委員会のメンバーには、地域関係者だけでなく、理事会理事の有志の方々にもご参加いただくことにいたしました。

特別講演、教育講演、大会シンポジウム、学会シンポジウム、研修セミナー、自主企画、一般演題など、さまざまなプログラムを用意し、魅力ある大会にしたいと考えていますが、そのためには会員皆様のお力添えが必要です。

ぜひご協力をお願いいたします。

群馬オンライン大会 実行委員会メンバー

大会長	浅見隆康（群馬大学健康支援総合センター）
副大会長	後藤雅博（こころのクリニック ウィズ）
実行委員長	須藤友博（群馬県立精神医療センター）
実行委員	
1) 地域関係者	植田俊幸（鳥取県立厚生病院・精神保健福祉センター） 工藤由佳（群馬病院） 田川みなみ（群馬県立精神医療センター） 土田正一郎（倶知安厚生病院）
2) 学会理事	安保寛明（山形県立保健医療大学） 池田 望（札幌医科大学保健医療学部） 市来真彦（東京医科大学 学生・職員健康サポートセンター） 内野俊郎（久留米大学医学部神経精神医学講座） 大石 甲（障害者職業総合センター） 木挽秀夫（中部学院大学看護リハビリテーション学部） 佐藤さやか（国立神経精神医療研究センター精神保健研究所） 佐抜洋平（医療法人慈和会 大口病院） 樽谷精一郎（新阿武山病院） 吉田光爾（東洋大学大学院ライフデザイン学研究科）

<http://www.japr.jp>

Mail japr.jimukyoku@gmail.com

事務局からのお知らせ

皆様 日頃より当会の活動にご協力ありがとうございます。

コロナ禍の中ではございますが、本年度は第 28 回 愛知大会を開くことができました。大変充実した熱のある企画が目白押しで、参加しごたえのある内容でございました。運営にご尽力を頂きました医療法人福智会の福智寿彦先生はじめ、スタッフの皆様方に重ねて御礼を申し上げます。また研修委員の先生方のご奮闘で、パトリア・ディーガン先生他のオンライン講演も実現されました。さらに、この 4 月には気鋭の広報委員の先生方の肝いりで、ホームページもリニューアルされる予定です。コロナ禍の中で、学会活動が展開しにくいという面もございますが、精リハ学会ではオンラインでも充実した企画・活動を提示していきたいと考えております。

2022 年度には群馬オンライン大会が開催予定です。これもひとえに学会員の皆様の会費納入のご協力によるものです。会費納入の依頼の連絡が近々ございますが、ご納入を頂ければ幸いです。

引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしく願い申し上げます。またくれぐれも皆様、お体をご自愛ください。

編集後記

現在、広報委員会では学会 HP リニューアルに向けた準備に奔走中です。新しいコンテンツは広報委員会だけでなく、学会の様々な関係者の協力を得て内容をまとめています。そういった関係者との調整は基本的にはメールでのやり取りになるのですが、ときには上手くニュアンスが伝えられなかったり、説明が不足していたりにご迷惑をおかけすることもしばしば。遠方の方々と手軽に顔を合わせて話せるオンライン会議はとても大事なツールになっています。オンライン会議でも皆さんの気遣いや優しさに助けられなんとか役割を果たしているのかもしれません。しかし大人数が参加するオンラインとなるとどうしてもスムーズな進行になるようにと目的に添った会話を心がけ、無駄な発言をしないよう意識が働き緊張してしまいます。直接会う機会があれば雑談も含めもっといろいろなお話しができて交流を深められるのになど残念に思うことがあります。来年度の大会も引き続きオンライン開催になり、当分の間は皆さんに直接お会いできない日々が続くそうです。また顔を合わせて語り合える日を楽しみにしています。最後に、これから生まれ変わる学会 HP を楽しみにお待ちください。来年度の早い時期に公開できるよう、鋭意作成を進めております。(広報委員会)

<http://www.japr.jp>
Mail japr.jimukyoku@gmail.com